
R ・ D

紅い赤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R・D

【Nコード】

N4349D

【作者名】

紅い赤

【あらすじ】

一人の女性が事件に巻き込まれる。そして一人の人物と出会う。

1：夢

『正義の味方』に憧れていた。

幼い頃、兄と一緒に戦隊モノのTVを見ていた影響が当時小学生だった私でも正義の味方というものに夢を持つようになり、兄とよく『一緒に悪者を倒そう』と話したのを今でも覚えている。

しかし、兄は中学に入学してからプロのサッカー選手になることを目指し始めた。男の子と言うものはコロコロと夢が変わるものなのだろうか。

「俺は夢を変えるけどお前はどうするんだ？」

いつの日か、兄は私を部屋に呼んで真剣な眼で訊ねた。

「私は変えるつもりは無いよ。最後まで目指してみる。」

小学校高学年になっていた私は小さな頃からの夢を諦めずに目指していた。と言っても小学生に出来ることも無く、ただ闇雲に勉強をして成績を上げて夢を心の中から消さないようにしていた。

いつも優しかった兄は私の言葉を聞いて静かに言った。

「それがお前の本当の夢なら最後まで頑張れ。応援しているから」
今になって思えば兄は悩んでいたのかもしれない。

小さな頃から兄に付き合わされて、兄と兄の友達とよく公園で日が暮れるまで遊んだものだ。いつも皆の中心にいた兄を私は尊敬していたし、兄のようになりたいと思ってひたすら追いかけていた。そのため、小学校に入学して友達が出来るまでいつも兄と行動を共にしていた気がする。

それを兄は後悔していたのかもしれない。自分が妹を連れまわして勝手に自分の夢を押し付けてしまったのではないだろうか、と
その時の私は兄の質問を深く考えずに、

「うん、大丈夫。これは私の夢だから。兄貴は兄貴の夢を叶えれば

良いじゃん。」
と無邪気に答えた。

その日以来、兄は何かが吹っ切れたようにサッカー部でどんどん活躍していった。キャプテンも勤め、高校受験ではスポーツ推薦で有名校に進学した。

兄が自分の夢に向かって進んでいく姿を見て自分も頑張ろうと喝を入れるのだった。

それから9年。兄はとうとう自分の夢を叶えて選手として活躍している。まだそれほど有名ではないがいつか世界でも活躍すると信じている。

私も中学、高校を卒業して警察学校に入り、晴れて卒業。警察官となり、夢を叶えた。

しかし、

「おらよ!!」

現実はその簡単ではなかった。国家権力を持つがただのちっぴけな人間であることに変わりにはなかったのだ。

この日、帰宅途中だった私は不良グループに呆気なく捕まり、サンドバックにされていた。警察手帳を見せたのがまずかったみたいだ。

時刻は午前零時。まだ起きている人もいるだろうに誰も助けに来てくれない。もしかしたら人が存在しないのではないかと思えるほど周りの民家は静かだった。

「オイオイ、あんま無茶すんなよ。死んだらどうすんだよ。」
「サツなんか死んだって別にいいだろうが、よ!」

誰かが歩道に倒れている私の腹をサッカーボールのように蹴りつける。体をくの字に折り、痛みに耐える。もうすでに十分吐いているため肺の空気しか出てこない。

「あーあ、こうなったら誰もミッチー止めらんねえよ。まだパくられたこと根に持つてみたいだし」

「おいミッチー。頼むから殺すなよー。あとでソレで遊ぶんだから。」

ぎやははは、と下品な笑い声が周囲に響く。釣られて仲間からミッチーと呼ばれた少年も笑い出す。

私は明滅する意識の中、願っていた。

（せめて誰も巻き込まれませんように）

今、この場に何も知らずに通りかかった者は男だろうが女だろうが無事では済まないだろう。だったらせめて自分だけが・・・

しかし、私に残った最後の正義すら届かなかった。

少年たちは一斉に笑うのを止めて突如現れたその人物を見た。

“そして死神は今日も人を連れて行く。”

1： 夢（後書き）

ちよつと短いすよね。初めて書いたんで文章で変でも勘弁してく
ださいm（――）m

2： 事件

目が覚めると時計は7時で止まっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

改めて目覚まし時計を確認する。まず全体がひび割れている。ス
イツチは完全に潰されて出てこない。

「・・・殺っちゃったか」

枕元にある携帯を掴み時刻を確認する。

10時38分。誰がなんと言おうと遅刻である。携帯の画面には
着信履歴が5件、メールは10通も着ている。いちいちメールを確
認するのも面倒になり、朝食も食べずに着替えて出勤する。

警察署内は朝からほどほどに騒がしかった。

何食わぬ顔で入るとどこに潜んでいたのか課長が現れた。

「お前、こんな時間まで何やってたんだ！？のんびりしてる暇なん
か無いんだぞ！」

「すいません。目覚まし時計が壊れてしまって起きられませんでした。

」

「・・・また壊したのか。」

「いやー、朝起きたら見るも無残な形に」

手を合わせて合掌。

「まあいい。それより仕事だ。内容はメールでも送ったが詳しくは
お前の相方から聞け。」

アレは相方とは違うのだが、と説明しそうになるが他人から見れ
ばそう見えるのかもしれないし無理に否定しないでおこう。疲れるし
「分かりました。課長はこれからどちらに？」

普段なら一日中デスクで部下を叱っているか寝ているかのどちら
かなのに入り口近くで会うのは珍しい。まさか帰るわけでもあるま
い。

課長は言いづらそうに頭を掻く。

「ん？俺か？ちょっと面倒な事件が起きてな。上からの命令じゃ断る方が事件を解決するより面倒だからよ。」

なんかこの人すごいこと言ってない？

まあ、どんな事件か知らないがとりあえず心配はしない。この人がもし死ぬのなら 是非ともその場面を見てみたい。

上司を見送って自分のデスクに着いた瞬間に霧本が現れた。

「おはようございます。今日はどうしたんですか？こんな中途半端な時間に出勤して」

ワンパンチ。しかも顔面

「うおっ！結構痛い・・・もしかして怒ってます？」

「当然です。早朝に迷惑メールを送っておいてその態度。袋に入れてサンドバックにしてあげようか？」

「それは勘弁してください。ところで仕事の話に入りますけど課長から何か聞いてます？」

変なタイミングで真面目になるのが霧本の特徴。良く言えば公私の切り替えが早い。悪く言えば馬鹿。

「いえ。メールはもらったけど貴方からのメールごと消しちゃったから、説明して」

「まあ、簡単に言えば行方不明者がかなり出ているんです。」

なんでも二日前から行方不明者の搜索願いが相次いで来ているという。

そのほとんどが20代半ばの男性であり、しかも判っているだけで同日ほぼ同時刻に一齐に行方が分からなくなっているらしい。

今朝も行方不明者の家族が搜索願いを出しに来て話を聞いたところ、行方が分からなくなったのは他の行方不明者と同じ日にちだったという。

「もっと詳しい資料は無いの？どこかに出かけたとか」

「何人かの家族や友人関係に話を聞いてます。」

その話によると最初の一人は会社員の男性で家族には仕事に出かけると言って家を出てそのまま行方不明。同じ会社に勤める同僚が出勤してこないのを心配して携帯や家に連絡をしたが携帯はつながらず、家にも帰って来なかった。

二人目はフリーターの男性でデパートに恋人と買い物最中、トイレに行つてくると言つて恋人から離れたきり戻らず行方不明。不審に思った恋人が係りの人に頼んでデパート内を探してもらうが見つからず夜になつても戻らないため警察に連絡。

そしてもつとも不可解なのが三人目の男性。大学生4年生で講義を受けている最中、隣に座っていた友人が一瞬、ノートに視線を移した間に鞆などの荷物を残して消えた。もちろん家にも帰つてはいない。

「ふーん・・・で？それってマジなの？」

「マジです。・・・うん、マジのはずです。」

そんな嘘みたいな事件をどうしろと言うのか。

「他には？その行方不明の人たちに共通点とか無い？昔にバカやつて誰かに目をつけられたとか」

こわーい人達に下手に関わるとたまにこういう事件が起こる。学生時代に上級生になつて浮かれ、自分たちが一番だと勘違いする輩がよく事件を起こすケースが多い。もしかしたら拉致されてコンクリと一緒に海底にいるかもしれない。

「それは今、西木が調べてます。今朝に来た搜索願ですが、その人達と同じ年齢でしたね。一人暮らしたったようで詳しい状況はわかりません。」

「そう。それじゃあ、時間もあるし現場を回ってみますか」

ここにいっても何も解決には進まない。部下に頼りすぎるのも良くないし、自分で調べるのが私にとっての確実な方法。
それが今、私が出来ること。

3：事件 - I I

「無駄足でしたね。」

「そうね。」

午前中から行方不明者が消えたとされる場所を見て回ったが解決の糸口なんてものは見つからなかった。目撃者から話を聞いても謎が深まるばかりでこれは本当に事件なのだろうか、と疑いそうになる。ていうかすでに疑ってます。

「これからどうします？署のほうへ戻りますか？」

「その前に何か飲み物買ってきてくれない？」

胸ポケットから500円玉を出して渡す。

「いいですよ。ちょうど僕も何か飲みたかったので。コーヒーですか？」

「いや、炭酸で。カロリーオフはやめてね、あんなの不味いだけだから。」

霧本は『わかりました』と、何故か嬉しそうに500円玉を握り締めて自動販売機を探しに行った。

「はあ・・・」

一人になったことで自然とため息も大きくなる。部下の前であまり頼りないところは見せられない。それが解決不可能な事件でも自分が出来ることを全てやるまでは。

実は今日一日で調べたことは決して無駄足では無かった。分かったことはたくさんある。ただ解決するには決定的な何かが足りないだけなのだ。

まず一人目の会社員。

自宅から駅まで約20分。そして4つ目の駅のすぐ目の前に会社がある。その間にはどこかに連れ去られそうな人気の無いところは無く、朝の自宅から駅までの道のりは犬の散歩をする老人や通学中の小、中学生が頻繁に通るため少なくとも連れ去られた可能性は低い。

そして二人目のフリーター。

トイレに入るところは監視カメラの端に映っていたが出てくるところは映ってなかった。

デパート内のトイレはどれも窓は付いているものの子供がやっと通れるくらいの大きさで大人では窓から出ることは不可能。あとから入った人間がトイレ内でバラバラにして一部を鞆に入れる、もしくは窓から外に落としたりしないと行方不明にはならないが手間がかかるし、リスクが高いため可能性は限りなく低い。

三人目についてはもう訳が解らない。

行方不明者を最後に見たという友人に話を聞いたが姿を消した状況が漠然としているため何ともいえない。解ったことはその日は確実に学校に来て講義を受けていたこと。大学の教授も行方不明者が出席していたことを確認していた。友人も目を離したのは1、2分程度だったらしい。

行方不明者は確かに存在していた。しかしこれ以上我々は何をしただろうか。

思考を止めてふと気づくと霧本がコーラの缶を持って走ってくるところだった。

「お待たせしました。あとさっき西木から連絡があって調べがついたそうですよ。」

「そう。それでどうだったの？」

コーラを受け取り、まず一口。感想は甘い。やっぱりコーヒーにしておけば良かったか。

「ほとんどが同じ高校の卒業生だったみたいです。他の生徒からは恐れられていたそうです。関わったら面倒なことになるって、陰で言われていたらしいです。」

「つまり不良だったってこと？」

「そうですね。詳しくは資料を見ないと解りませんがあの高校は不良が多いってことでちょっとした有名校でしたから」

これでまずトラブルに巻き込まれたのは間違いない。しかし問題

はどのようにして姿を消したのか、その方法が分からない限り解決はしない。

まあ、一日で解決できるわけがない、と自分に言い聞かせ、霧本に運転を任せて署に戻る。先に戻っていた部下の西木から資料をもたらって目をおしてみる。

なるほど。これだけ問題や事件を起こしていれば恨みを買った輩がいてもおかしくない。何かしらの力が働いたとしても卒業出来たのが奇跡だ。新たな行方不明者も合わせて9人。その内8人が高校時代にチームを作り暴れていたらしい。チームの名前まで付けているのは遊び感覚だったからだろう。チーム名は・・・

「ブラッディクロス？」

どこかで聞いたことがあるような。

「ブラッディクロス・・・」

自分の記憶を探ってみる。在り来たりな名前だからではない。確か

『てめ、 なことして むと思 ！俺の はブラッディクロス ーダーだぞ！』

画像は出てこないが確かに誰かがこのチーム名を口にした。それも私が近くにいる場面で。

思い出せ！少なからずこの事件に関係しているのは間違いないはず。

しかし、いくら記憶を探ってもそれ以上の手がかりは出てこない。まだだ！と気合を入れてもっと深くまで探ろうとしたとき。

「警部補！起きてください。」

「え？」

ハッと顔を上げると目の前に霧本の顔が見える。辺りを見回してみると外はすでに真っ暗。時刻も深夜になろうとしている。残っているのも自分と霧本の二人だけになっていた。ほんの数分間だけ

考えていたはずなのに時計を見る限りアレから数時間も経過していた。

（おかしいな。気を失っていた訳じゃないのに）

頭を抑えていると霧本が心配するように自分が飲むために買ってきたと思われる缶コーヒーをくれた。

「疲れてるんですよ。今日はもう帰ったほうがいいですよ。事件だって明日になれば進展して解決するかもしれないし」

「・・・そうね。ちょっと根を詰めすぎたのかな。」

荷物をまとめ、廊下に出る。なんか今日一日で一週間分疲れた気がする。明日は一日中デスクでゆつくりしたいな、と願いながら帰宅するのであった。

次の日。疲れのせいか、またしても寝過ごしてしまった私を起こしたのは携帯のアラームではなくドアを叩く騒音だった。

ドンドンと遠慮など全く無い音が部屋に鳴り響く。まったく、朝から警官に喧嘩を売るとはいいい度胸ではないか。寝過ごした私が言うのもなんだが安眠妨害は犯罪なんですよ？私の中で

「はいはい。今行きますよー」

パジャマのまま玄関まで移動するも玄関マットで足を滑らせて転倒。その間にも五月蠅いノックの音は止まずイライラは一気にMAXに。

「はいはい。これ以上その騒音ノックをするようだったらノックの出来ない状態にしちゃいますよ？」

「あ、警部補！・・・ってなかなか際どい格好してますね。」

ドアを開けた先にいたのは部下の霧本だった。なんでコイツは私のアパートの場所を知っているんだろう？まあいいか、それより、

「なんだ霧本くんだったんだ。だったら一発くらい良いよね」

「・・・はい？」

ボディブロー

「それで用件は？ていうかなんで住所知っているの？」
うずくまっている霧本を眺めながら話を進める。

「・・・い、いやちよつと。冗談じゃなく大変なことになっているんですよ！あの行方不明者たちが廃工場で発見されたいらしいんです！」

「・・・そう、分かったわ。5分で準備するから案内して。」

ドアを閉めて服を着替えながら思う。

『なぜ自分はこれほど冷静なのだろう？』

昨日初めて聞かされた事件がその次の日に一気に解決に近づくなんて普通ではまずありえない。なのに自分は全く動揺していない。

パトカーで移動中に霧本に詳しい状況を聞こうとしたら

「いえ、俺は報告を受けただけで実際に現場を見たわけでは無いんです。ただ現場のほうもパニックになっているみたいで、おそらく行方不明者だ、としか聞いていないんです。」

「すいません、と謝る霧本。彼に非は無い。本来なら私がその報告を受けて部下に指示を出さなければならぬ。つまり非は私にある。謝る必要は無いわ。ところで『おそらく』ってことははっきり確認したわけでは無いということね。」

誰か行方不明者の顔写真を覚えている人間が現場に到着しない限り発見されたのが行方不明者だと断言は出来ない。

「いや、それがちよつと引つかかるんですよね。」

運転中の霧本が視線を前に向けながら話し始める。

「さつき、自分が報告を受けたって言いましたよね？」

「ええ。」

「実は報告してきたのは西木なんですよ。今朝に人が死んでるって110番通報がありまして、それで西木が新人をつれて向かったんですよ。その後に報告を受けて何人かに現場に向かってもらったんですけど・・・」

霧本は一拍置いて思案顔になり、

「西木も行方不明者の顔は覚えているはずなんですよね。」

と言った。

「……！」

頭の中が一度真っ白になった。そして自分でも驚くほど回転が速くなる。

そうだ。行方不明者の顔を知らない者が現場に行けば私が捜査している『大量に行方不明者が出ている』という事件とは結びつけずに報告するだろう。

つまり先に現場に行った西木には私が捜査している事件との関連性とそれを断言できない理由がある。

「霧本。出来る限り急いで。」

私の声に霧本は無言でアクセルを踏んで答えた。

現場周辺はすでに野次馬でいっぱいだった。

「こちらです。」

現場に到着していたほかの部下に案内されて敷地内に入る。

K E E P O U Tのテープをくぐり、工場の入り口で自然と足が止まった。元が工場だと言われなければ分からないほどボロボロになり、入り口には扉が無いのか大きな布がカーテンのように着けられている。鑑識の人間が出入りする度に工場内の異臭が外に漏れる。少し離れた草むらでは数人の警官が胃の中ものを吐き出している。おそらくこのカーテンの先は別の世界が広がっている。入るな、見てはいけないと理性が叫ぶ。今ここで後ろを向いて歩くことが出来たらどれだけ楽だろうか。

しかし、どんなに逃げる選択肢があろうと私は前へ進む以外の選択肢を選ぶ権利は無い。

「……無理しないでいいわよ？」

後ろにいる霧本を見ると無理をしているのがはつきりわかる。彼はまだ引き返すことが出来る。

「・・・いいえ、自分も行きます。」

しかし、彼は真っ直ぐ私を見つめながら言い切った。

「・・・そう」

私はゆっくり工場内に足を踏み入れた。

最初に感じたのは空気の重さ、そして異臭。そして視界に入ってきたのはライトに照らされた血の海とその海に浮かぶ大量の何か。状況を理解することが出来ない。これはなんだ？目の前にある光景をなんと呼べばいい？

思考が完全に奪われる。目の前の光景から目を逸らせない。

「うつ！・・・」

後ろから呻き声が聞こえ、誰かがカーテンの外、この世界から出ていった。

そこでようやく理解した。出て行ったのは部下の霧本。理由は初めて見た死体が異常だったからだ。つまり目の前にあるのは

“死体”

「・・・西木」

工場内の入り口近くで鑑識と話を終えた西木を呼ぶ。

「はい・・・警部補、大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫。それで何かわかった？」

「はい。鑑識の結果、まだ詳しい死因や身元までは分かりませんが死体は6人分。すべて男性です。それと生存者が2名、その内1名が重傷です。さきほど2名とも救急車で運ばれました。」

「そう、ありがとう。ご苦労様。ここは私が引き継ぐから外の方を願ひ。あと霧本も」

「・・・分かりました。」

西木は失礼します。と、一礼してから外に出ていった。

昔、お金が無いときに賞味期限切れの食品を食べて吐いたことはあるが何かを見ただけで吐いたのは初めてだ。

最初、自分が何を見ているのか理解することが出来なかった。それならまだこんなことにはならない。でも、見てしまった。見つけてしまった。

あれは間違いなく人間の

「うつ・・・」

思い出すな！あれはまだ未熟な俺には刺激が強すぎる！

あの人はあの光景を見て、よく平気でいられるな。

「大丈夫か？」

工場から出てきた西木が俺の背中をさする。そういえばコイツはずっと工場内にいたのか？

「ちよつと落ち着いてきた。サンキユ。」

スーツが汚れるのも構わず壁に寄りかかる。

「しかし、すごいな。お前もあの人も。俺はこの様なのに・・・」
もう俺にはあの空間に戻る勇氣は無い。

「すごいのはあの人だけだ。俺だって最初に見たときは今のお前と同じ状態だったよ。ただお前と違うのは死体を見るのが初めてじゃなかったただだ。」

「そうか・・・」

それを聞いてなんとなく気持ちが悪くなった。吐き気も引いたし、いつまでも休んでいるわけにはいかない。

「さて、仕事しますか！」

少しでもあの人に近づくために、今出来ることをやろう。

3：事件 - I I（後書き）

かなり時間が掛かっちゃいました。おかしなところがあったらごめんなさい

4：事件・IIII（前書き）

前回のあらすじ：謎の大量殺人事件を捜査している内に不審な点に気づき始め、さらに捜査を進めていく。

4：事件 - I I I

「こんにちは」

病院独特の匂いがする病室に入ると彼女は体を起こして笑顔で迎えてくれた。

「はじめまして。連絡してきた刑事さんですよね？」

「はい。水野と言います。怪我の方は大丈夫ですか？」

今日は事前に許可を取って面会に訪れた。

一週間前に起きた廃工場での行方不明者大量殺人事件は捜査の結果、死者11名、重傷者2名と発表された。そして今日はその生存者の一人に事件の詳細を聞くために出向いたのだ。

彼女の名前は白木くらか。被害者の中でただ一人の女性で一番軽傷だった。

「ただの骨折ですから大丈夫ですよ。無理に動き回らなければすぐに治るって言うてました。」

と言って彼女は明るく振舞う。

発見された直後、彼女は放心状態で声をかけても反応しなかったらしい。服は元の色が分からないほど血まみれで慌てた西木が急いで救急車で病院に運ばせたが目立った外傷は無く右肘と足の骨折だけだった。

すでに何度か部下に事件について聞いてくるよう病院に行かせたが、その頃は精神状態が不安定で特に男性が近づくのを極端に恐がって話が聞けない状態であった。そこで今回、私一人で訪れたのだ。私は近くの丸イスに座り、名刺を渡した。彼女は丁寧に両手でそれを受け取り、じっと見つめる。

「水野・・・カヅキ?・・・って読むんですか？」

「いえ、カゲツって読むんです。花に月で“花月”です。ただ、呼ぶのであれば苗字で呼んでください。」

「あれ?もしかしてご自分の名前が好きじゃない・・・とか？」

恐る恐るという感じで聞いてくる。

「まあ・・・そうですね。嫌い・・・というか、あまり気に入ってないんですよ。」

自分としてはもうちょっとカッコイイ名前が良かったと思っていた。

「私はちよつと羨ましいですね。花に月って良いじゃないですか。私の名前なんて意味不明で、何を思っこの名前を付けたのか・・・」

「確かに“くらか”なんてあまり聞かない名前だけど悪くないと思う。」

まあ、人それぞれ名前に対する感じ方が違うということだ。

それにしても彼女が元気に微笑む姿が見れて安心した。入院当初は返事も出来ず、ただ目だけを動かすことしか出来なかったらしい。今でも見知らぬ男性が廊下を通り過ぎる姿を見ると少し怯えてしまふと担当医師は言っていた。『話を聞くのなら無理はさせずにゆっくり訊いてください』と念を押して。

「そろそろ本題に入ってもよろしいですか？」

私の問いに彼女は笑顔を消して小さく頷いた。

「事件について、くらかさんが知っていることを話してください。一度だけで結構ですし、急ぐ必要ありません。」

「わかりました。」

そうして彼女は意外にも落ち着いていた様子で語り始めた。

あの日、私は死神に会ったんです。

オレンジジュースのボタンを押して缶を取り出す。そういえばオレンジジュースなんて最近飲んでなかったなあ

病室に戻るとくらかさんは落ち着いていたようで笑顔でおかえりと言った。

彼女から話を聞いた後、喉が乾いたという彼女に何か買ってあげようと一度席を外した。話を聞いたら席を外そうと決めていたが要らない心配だったみたいだ。

ジューズを手渡し、一息つく。もう用件は済んだ。あとは邪魔にならないように退室するだけ。けれど私はどうしても彼女に聞いておきたいことがあった。本当なら事件について必要以上のことを聞くことはあまり被害者に対して好ましくない。それは分かっていたのだが彼女の様子を見て大丈夫だろう、と勝手に思った私は訊ねてしまった。

「なぜその人に対して『死神』なんて言葉を使っただの？」

彼女の話に出てきたある男。今回の事件の起こした犯人であると同時に彼女を救った人物でもある。

しかし彼女はその言葉を終始使っていた。確かに11人の人間を虐殺した人物をそう呼んでもおかしくは無い。けれど彼女から嫌悪の感情は一切無く、むしろ好意を持っているように見えた。

「あ、そのこと？別に私が名づけたわけじゃないわ。私、去り際に聞いたの。貴方は誰ですか？って。そしたらちよつと悩んでから『死神だ』って」

「そう。なんていうか・・・変わった人みたいね。その死神さんは犯人はまともな精神の持ち主では無いことが100%になりました。まあ解っていたことだけだ。

「それではそろそろ署の方に戻ります。すみませんでした。長居してしまつて」

「いえいえ。私も話が出来て何かすっきりしました。」

時計を見ると丁度昼の12時だった。彼女はこれから軽く検査を受けるらしく、途中まで見送ると言った。彼女を乗せた車椅子を押しながら他愛も無い世間話。笑顔で会話をする彼女は年相応の笑顔で・・・って・・・

あれ？ちよつと待って・・・彼女はたしか・・・

入り口近くで別れを言い、病院を後にする。待ちくたびれて眠っている霧本を叩いて起こし、署に向かった。

自分のデスクについて被害者の資料を読みながら事件について自分なりに考えてみる。

くらかさんが語った話はおよそ私の考えとは全く違うものだった。彼女は昔からの男友達に『面白いものが見れる』と誘われ、工場へ足を運んだ。そしてそこで待ち伏せていた数人に捕まった。逃げられないようにと腕と足の骨を折られ、一人を除く6人に集団暴行を受けていた。唯一暴行するのに反対した青年一人が参加せずに彼女の財布だけを奪って工場の奥に移動。そのとき、突然外が騒がしくなり全員が動きを止めた。外の騒ぎは数秒で収まり、工場内に一人の男が乱入してきた。真っ黒のコートを羽織ったその男は周りの少年達を無視して彼女に語りかけた。

「助けてほしいかい？」

少年達が呆気に取られる中、彼女は答えた。

「助けて」と

「わかった。」

その言葉から3分後。6人はバラバラにされて血の池と化し、工場内は静まり返った。彼女は何が起きたのか理解出来ずただ茫然としていた。そして唯一、暴行に参加しなかった少年に重傷を負わせて男は彼女に向かって言った。

「ごめんね。不器用だからこうするしかなかったんだ。・・・それじゃ、いい夢を」

そうして男はポケットから懐中時計を取り出した。それを彼女に

手渡してそのまま去っていった。

事件の内容としては彼女の話どおりなのだろう。男が残した懷中時計は証拠品として保管してる。時刻がズレていること以外に特に変わったところは無い。しかしそれでは何故死亡した彼らは事件を起こす数日前に姿を消したのだろうか。事件を起こす前に何らかの行動をすれば逆に周囲から怪しまれる。

なんのメリットも無いはず。それとも何か理由があったのだろうか。

それと今日病院を出る前、くらかさんに感じた違和感。年相応の笑顔・・・とつい思ってしまった。資料を見ると『白木くらか』は現在24歳。いい大人だ。しかし、病院で見た彼女はとも24には見えない。高校生だと言われればすんなり納得しただろう。大学生だと言われれば一瞬戸惑うも納得できたかもしれない。もし社会人だと言われたら・・・。

もちろんこれは私の個人としての考えだ。他人からすれば『童顔』だという理由で納得できるのかもしれない。

そして事件の犯人である自称『死神』。調べた結果、まずバラバラになった死体の傷口を見る限り刃物で切り落としたのではなく力で無理やり千切ったような傷口だという。そのため犯行はすべて素手で行われたものと考えられる、が・・・実際にそんなことが人間に出来るものなのか、という疑問が発生する。被害者からの証言から推測するに一般成人男性と対して変わらない体型だと思われる。なら素手でも何らかの手段、方法があるはず。

「警部補！ちよっとこれを見てください！」

霧本が乱暴にドアを開けてデスクまで駆け寄ってきた。

「な、なに？どうかしたのか？」
とりあえず落ち着かせようと声をかけたが霧本はこれを無視。持っていた封筒を私の目の前に突き出す。

「これを・・・見てください。」

受け取った封筒の中身の資料を見て驚愕した。およそ現実ではあ

りえない事実が書いてある。嘘だと、でたらめだと思うことも出来た。しかし私はなぜか嘘ではないと第一に思ってしまった。

資料にあった3つの矛盾

1つ、死体が見つかった廃工場は3年前に取り壊しが決まって存在しない。付近の住民、解体業者に確認が取れている。

2つ、死体で発見された男たちの内一人が1年半前に不慮の事故で死亡したことになっていること。墓地も確認。

3つ、生存者で現在意識不明の男も半年以上前にバイク事故で死亡している。2つ目同様、墓地も確認。

封筒には他にも工場が取り壊された後の写真、バイク事故現場の写真が同封されていた。

もう何が起きているのかわからない。

突然、心臓が重くなるような感覚が襲う。理解が、思考が、追いつかない。

そのまま暗闇へと落ちた。

4：事件・IIII（後書き）

時間を置くと前回どんなことを書いたのか忘れちゃいますね^^；
自分でもたまに混乱しますorz

こんな読みづらい小説を呼んでくれた方に深く感謝します。本当に
ありがとうございます。

次回でとりあえず完結させて新しいのを書こうと思っています。実
はすでに内容はだいたい出来上がっています。そしてタイトルが決
まっていない・・・orz

5：カラクリ

見知らぬ光景が見える。

いや、ちがう。この光景は見たことがある。近所の通りだ。でも知らない。だって、この道はこんなに赤くなかった。

赤い？違う・・・紅い

なぜだろう。知っているはずなのに・・・知らない。

曖昧だ。頭がうまく働かない。

ぼー、とする。そっか、夢だ。

夢を見ているんだ。

目が覚めると休憩所の長椅子に寝ていた。時刻は夕方窓の外は綺麗なオレンジ色で輝いて見える。ただ、寝起きの目にはあまり優しくない。

起き上がると誰のものか上着が掛けてあったことに気づく。ぼー、とする頭でまるで機械のように上着を畳む。

「あ！警部補！目が覚めたんですね」

トイレから出てきた霧本が私を見て安心したようにため息をついた。

「ごめん。眠ってたみたい。」

「眠ってたって・・・まあ、なんともないのであれば別に良いですけど。」

そう言って霧本は私の向かいの椅子に座る。私は無言で畳んだ上着を霧本に返し、コーヒーでも飲もうと立ち上がった。しかし霧本が「俺が奢りますから警部補は休んでいてください。」

と、強引に私を座らせて私がいつも飲んでいる銘柄のコーヒーを

買って渡してくれる。

「ありがと。悪いわね。」

「いえいえ。前回のお釣りですから、あと3回は奢れますよ。」

奢れるって・・・それは元々私のお金では？ま、パシらせたからあげたつもりだったけど。

「それよりこれからどうします？捜査の方は続けますか？」

コーヒーを飲む手が止まる。今回の事件は謎が多すぎる。新たな情報が出てくる分には一向に構わないがそこに現実ではありえない矛盾が起きている。霧本もあの資料を見て混乱しているのだろう。

「今更になって『解決できないからやめます』とは言えないのよ？上を目指すなら何らかの形でケリをつけなきゃならない。中途半端は許されない・・・」

黙って私の話を聞く霧本。その顔にはまだ不安の色が残っている。
「・・・って、大昔に課長が言ってたって話。別に無理強いはいわ。責任者は私だから今の話に君は完全には当てはまらない。捜査を抜けてもつと簡単そうな事件で手柄を立てるのも利口なやり方だと思う。ただ、もし君が私と同じ立場になったらさっきの話を思い出して、考えてから行動しなさい。」

デスクに戻ろうと立ち上がるうとした私に霧本は尋ねた。

「一つだけ答えてください。今回の事件、解決できますか？」

一瞬考えた後、私は霧本を見ないで答えた。

「ケリは必ずつけるわ。それが『解決』になるかどうかは分からないけど」

これが正直な気持ち。まだ諦めるには早い。

「・・・フツ。相変わらずカッコイイなあ、警部補は。」

「女性にはあまり嬉しくない褒め言葉ね。」

「そうですかね？それはそうと、さっき西木から連絡が入りまして工場付近で黒いコートを着た人物を見たという人から話を聞いているそうです。」

すぐに仕事モードに切り替わる霧本。こちらもいつまでも寝ぼけ

ているわけにいかない。

「分かった。それじゃ」

早速動き出そうとした私はエレベーターを見て止まってしまった。別におかしな所は何もない、それなのに私は前に一步踏み出すことすら出来ない。二つあるエレベーターの内、右の扉が私の目の前にある。1階で止まっていたエレベーターが私がいる4階へと近づいてくる。

「あ・・・あ・・・あ・・・あ・・・」

逃げると本能が叫ぶ。逃げたい、けど逃げる理由が分からない。なぜ？なぜ逃げる？何が来る？

ポーンという電子音が響いてエレベーターが4階止まる。扉が開き現れたのは

「ん？どうかしたのか？」

課長は目の前にいた私が固まっているを見て声をかけたが私の耳には届かなかった。課長の後に続いてエレベーターから降りた青年しか見えていなかった。季節はずれの黒いコートを着て静かに現れた青年は私に気づくと悲しそうな笑みを浮かべ、こう言った。

「ごめんね。時間切れだ。」

この日、私は目を覚ました。

目の前にいつか見た光景が広がっている。今度は鮮明に、リアルにそうだ。私はまだ新人だったころ、この道で不良に絡まれ私刑にされていた。その時、彼が来た。

「助けてほしい？」

周りの不良など視界にすら入らないかのようにまっすぐ私の前まで来て囁いた。

「いいから・・・逃げて」

私は助けを拒絶した。巻き込まれないうちに逃げてほしかった。

「君はすごいね。この状況で他人の心配をするなんて」

でもね、と一度区切ると青年は近くにいた不良の頭を掴み、

「もう遅いんだ。」

と言ったように聞こえた。でも自信が無い。だってグシャツつて音と同時にたつたから。倒れている私から見えたのは青年が不良の一人の頭を掴んだトコまで。そこから視界の外に消え、いろんな音が耳に入ってくるだけだった。

グシャ バキ ゴリ グチャ ドス ビリ グチャ e t c

所々悲鳴のような声も聞こえたような気がした。

「てめえ、こんなことしてただで済むと思うなよ。俺の兄貴はブラッディクロスのリーダーだぞ！」

誰かの声が聞こえる。あの青年ではない。この台詞は聞いたことがある。『ブラッディクロス』とはこの頃それなりに大規模な不良集団の名前だ。暴走族だったかギャングだったか

「必ず後悔するぞ!？」

「それはない。この前、殺したはずだから」

青年の冷たい声が聞こえる。殺した？人を？殺したのか？

ゴトツ、と視界に何かが飛び込んできた。それは頭部と左腕が欠けた人間だ。

「大丈夫か？」

青年が私の目の前に時計を置く。綺麗な銀色の懐中時計だ。

「この時計であと30秒後に君は夢を見る。それはとても長い夢だ。もし君がその夢の中で強くなることが出来れば、きっとこの世界でも生きていける。」

青年はそれだけ言って、去った。

そして私は夢を見た。およそ6年間も夢の中を生きて今、夢から覚めた。

本当の私の時間から1秒も進んでいない。いや、今、やっと追いついたのだ。現実には。携帯に目をやるとメールが10件、着信も

10件来ていた。てきとーに一番新しい着信履歴に掛けてみる。

「警部補？！どこにいるんですか！？」

スピーカーから耳を離す。全身ボロボロなのに聴覚まで潰す気が、こいつ。

「霧本。心配してくれているならポリウム下げて」

「警部補？あ、すいません。って！そうじゃなくて大丈夫なんですか！？」

「大丈夫じゃないわね。悪いけど私のアパートまで救急車呼んでくれない。途中に転がってるから」

そう言って通話を切る。6年前と比べて街の光が届くようになったのか周りがよく見える。道路は紅のペンキをぶちまけた様になっている。

バラバラの死体が散乱し、臭いもすごいことになっている。昔の私なら胃の中が無くなるまで吐いていたかもしれない。

これも彼の思惑なのだろうか？いや、配慮と言った方が良いかもね。

（霧本）

状況が全く分からないが警部補と連絡が取れたことで一先ず安心できた。言われたとおり救急車を手配し、パトカーで現場に向かう。「途中に転がってるって言ってたけど・・・どこだよ」

あと5、6分でアパートに到着するということで車を止めた。暗闇の中、車のライトに照らされた道路に何かがある。

「・・・足跡？」

しかも紅い。どう見ても血だ。

一瞬脳裏に一番嫌な画像が、“アノ人がこの色に染まっている”もつとも見たくない画像が想像される。

すぐさま携帯を取り出しリダイヤルするが一向に出る気配がない。それでもスピーカーを耳に当てたまま足跡を逆に辿ってみる。大き

さからしてまず男と断定。

意外にもすぐに目的の場所に着いた。誰かの携帯の着信音が鳴り響くその空間はいつか見た廃工場の光景を思い出させた。比較的冷静でいられたのは規模が小さかったからか、もしくは一度経験したからか。この際どちらでも構わない。

ゆつくりと紅い水溜りの上を歩いて行く。頭を半分摩り下ろされた様な死体の脇を通り、散乱した四肢を避け、道路に置かれた生首に睨まれながらも先に進んだ。

街灯の下、丁度良く水溜りが避けている場所に生存者を発見した。
「警部補？・・・大丈夫ですか？」

肩を軽く叩こうと手が触れるとガシツと捕まれた。警部補は虚ろな目でこちらを見る。

「やっと来た。もう少しで寝るところだったわ。悪いけど肩貸してくれない？」

その声はいつも聞く声とは少し違って女性というよりは少女のようだった。いや、声だけではない。身長も自分とほぼ同じだったはずが肩を貸して立ったときには軽く屈んだ状態で丁度良い高さになる。顔つきもどこか凜々しさが減って幼さがあるように見える。

パトカーに戻る最中、

「警部補。一つ聞いても良いですか？」

「・・・え？・・・なに？」

「若くなつてませんか？」

我ながら馬鹿なことを聞いてしまったと後悔。不意のツツコミに備えて警戒したが警部補はなぜか笑いながら言った。

「ははは。もう気づくとは。なんと言うか鋭いな。」

「・・・は？」

「そうだな。・・・この場合、今は23歳になるのか」

23？あれ？警部補は確か・・・

「私が若くなつたからといって変なことをするなよ。」

「し、しませんよ！！ていうか・・・え？どういふことなんですか

？」

「あとで説明する。とつとと病院まで運んでくれ。これでも軽症じゃないんだ。」

救急車が到着するまでの間、彼女はどこか満足したようにずっと夜空を見上げていた。

状況はさっぱりだったが、無言で上を見上げている時間は不思議と心地よかった。

5：カラクリ（後書き）

まず、読んでくれた方ありがとうございます。

こんなg d g dなストーリーですがとりあえずこれで終わらせようかと思っています。

昔、暇つぶしに書いた小説なのでここまでしかありません。一応大まかにこの後のストーリーは考えてあるんですが大まか過ぎてさらにg d g dになりそうなのでとりあえず終了。

気が向いたら続きを書きます。

次はもう少しマシな内容の話にします。大丈夫です！たぶん！

では、もう一度。ありがとうございました！m（——）m。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4349d/>

R・D

2010年10月8日15時15分発行